

アジア太平洋戦争後の〈私小説〉の研究——文学場の変容と拡張 要旨

博士後期課程 伊豆原潤星

本論文は、アジア太平洋戦争敗戦後の一九四五年から一九六〇年までの〈私小説〉をめぐる文学場を論じるものである。

従来の〈私小説〉を巡る研究は、〈私小説〉とされる小説の分析を中心に行ってきた。しかし、〈私小説〉なる語の定義は曖昧であり、時代・論者によって異なっている。それゆえ、小説を論じるだけでは、〈私小説〉の内包と外延とを動態的に記述することは不十分なままである。本論文は、小説本文だけでなく、同時代の評論や映画、読者の反応などを複合し分析する手法において独自性を持つ。

第一部では、敗戦後の一九四五年から五〇年頃を論じる。この時期は、敗戦を起点に、新しい文学理念や社会制度が求められた時代である。一九五〇年までとした理由は、戦後における〈私小説〉言説で重要な、伊藤整『小説の方法』が一九四八年、中村光夫『風俗小説論』が五〇年に刊行されたことが大きい。伊藤や中村の論は、平野謙らとも相互に影響を与え合いながら、戦後の〈私小説〉の基礎を築いていった。彼らの論には、敗戦直後の日本社会の状況が反映されているため、敗戦後の〈私小説〉を論じる上で、一九四五年から五〇年という区分をとった。

第一章では、上林暁「死者の声」を論じる。本小説の特徴は、上林がこれまでに書いてきた「病妻もの」を反転するような構造になっていることである。敗戦後、〈私小説〉作家も新たな〈私小説〉を模索していたことを示す。

第二章では、加藤周一・中村真一郎・福永武彦による『一九四六 文学的考察』を取り上げる。彼らの〈私小説〉批判は、形式の新しさが内容の更新をもたらすというものだった。この論については、批判もあったが、彼らの場合、新世代による〈私小説〉批判というスタイルに意味があるといえる。

第三章は、敗戦直後の〈私小説〉をめぐる文学場を概観したものである。敗戦直後に〈私小説〉再評価の動きがあったこと、しかし民主主義理念の導入によって、〈私〉そのものが問題にされる中で〈私小説〉も批判の対象となっていくことを明らかにする。

第二部は、一九五〇年代を取り上げる。一九五〇年代は、朝鮮戦争や再軍備をはじめとする「逆コース」に直面するだけでなく、新しい文化が芽生えつつあり、〈私小説〉も大きな変質を余儀なくされる時代である。

第四章は、上林暁「緋文字」を論じる。本小説は、レッドパージにあった新聞記者と〈私〉が対話する小説である。社会と切断しているものとされる〈私小説〉が、社会と交差したときに、〈私小説〉はどのように位置づけられるのか論じる。

第五章は、大岡昇平「妻」論である。この短編は、当初「妻——私小説——」という題で、〈私小説〉が副題についていた。副題がなくなるのは、尾崎一雄からの批判を受けてからのことである。あえて「私小説」と名付ける〈私小説〉とはどのようなものなのかを論じ、同時代において〈私小説〉が方法論になりつつあったことを明らかにする。

第六章は、川崎長太郎ブームについて論じる。一九五四年に起こった川崎長太郎ブームと〈私小説〉の中間小説誌への接続によって、〈私小説〉を読む読者層と〈私小説〉自体が変質していったことを明らかにする。

第七章では、上林暁の病妻ものを原作とする映画、『あやに愛しき』を論じる。〈私小説〉が、小説よりもさらに広範な受容層を持つ映画になることで、〈私小説〉が変容していくことを論じていく。

第八章は、井伏鱒二の小説を原作とする映画『貸間あり』論である。映画の分析を通じて、戦後社会に生きる知識人としての〈私〉と大衆がどのように接続していくかに迫る。そのことは、〈私小説〉と読者の関係とも相似的關係を持つ。

第九章は、一九五〇年代の文学場を概観する。批評言説において、伝統としての〈私小説〉観の持続と変容が見られることを論じ、一九六〇年の〈私小説〉再受容の前夜を論じる。

第三部は、一九六〇年を取り上げる。この年は、戦後〈私小説〉において、極めて重要な年である。批判を受けながらも存続していた〈私小説〉に芥川賞をはじめとする文学賞が与えられるのである。この現象が、一九五〇年代に醸成された〈私小説〉観に基づいた、政治の季節から遠ざかろうとする文学場の力学によってもたらされたことを明らかにする。

第一〇章は、一九六〇年という政治の季節において、三浦哲郎『忍ぶ川』が〈私小説〉として芥川賞受賞したのはなぜかということを論じる。

第十一章は、鳥尾敏雄「死の棘」論である。長編小説としてではなく、一九六〇年頃に発表された「離脱」「死の棘」「崖のふち」の三作品を中心に、〈私小説〉の深化を論じる。

本論文の成果は、戦後派文学の仮想敵としての〈私小説〉があるといった一面的理解ではなく、〈私小説〉が戦後において様々なジャンルや社会状況と切り結びながら展開していったという戦後文学における重要性を確認したところにある。